



水田除草剤の剤型の特性と注意点について

水田で利用する除草剤の剤型には、下記の表にあるように様々な剤型があります。また、使用方法では水口施用や田植同時散布など、種々の使用法が導入されています。これらの剤型や使用法は、それぞれに利便性や省力性を備えている一方、注意すべき点も持ち合わせていますので、その特徴と使用上の注意点について紹介します。



<除草剤の効果を高めるポイント>



- 1 健全で強靱な苗を育苗します。
- 2 代かき作業は丁寧に行って、**凸凹のない均平な田面に**することが最も重要です。
- 3 前年に発生していた雑草の種類や発生時期を検討し、それらに**適応した除草剤を選んで処理**します。
- 4 処理する除草剤の使用法、注意事項等をラベルでよく確認し、**薬剤を均一に処理**します。
- 5 水田からの除草剤の流出と環境への負荷を減らすため、**薬剤処理後の7日間は止水管理**をします。
- 6 除草剤が安定した処理層を形成するのに48～72時間程度を要するので、処理後すぐに水田へ入らないようにします。

	散布方法・特性	注 意 点
1 1キロ粒剤		
	<ol style="list-style-type: none"> 1 水田内全面に均一に散布機器を使用して散布する。 2 田植機に専用装置を装着し、田植えと同時に散布する（使用時期が移植時の登録薬剤のみ）。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 散粒機器の散布量の調整を適正にして、撒き過ぎや不足に注意する。 2 田植同時処理では、植付深度を適正にする。浅植えや浮苗、土の戻りが極端に悪い水田では葉害の恐れあり。移植後は速やかに入水し、補植は原則行わない。
2 ジャンボ剤		
	<ol style="list-style-type: none"> 1 水溶性フィルムに包まれた小包装（パック）を、10a 当たり数～数十個を水田畦畔から投げ込む。水中（水面）拡散機能が高いためムラなく均一な処理が可能。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 散布時の水深は、少し深めの5cm程度が目安。 2 田面が均平でない水田では、拡散が妨げられるので、事前に改善が必要。 3 藻類や表層はく離の発生が多い水田では、拡散が妨げられ効果が落ちるので、散布しない。
3 豆つぶ・楽粒・FG剤		
	<ol style="list-style-type: none"> 1 ①水田周縁からの散布、②風上畦畔からの1～2辺散布、③無人航空機による散布などに対応。水中（水面）拡散機能が高いため、ムラなく均一な処理が可能。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 散布時の水深は、少し深めの5cm程度が目安。 2 田面が均平でない水田では、拡散が妨げられるので、事前に改善が必要。 3 藻類や表層はく離の発生が多い水田では、拡散が妨げられ効果が落ちるので、早めの散布に心がける
4 フロアブル剤・顆粒剤		
	<ol style="list-style-type: none"> 1 フロアブル剤の原液を、水田畦畔などから歩行しながら本田内に手振り散布する。 2 フロアブル剤原液を、田植機に専用装置を装着し、田植えと同時に散布する（使用時期が移植時の登録薬剤のみ）。 3 圃場に散布するフロアブル剤、顆粒剤等の全量を、入水時の水口に一気に投入して水田全面に拡散させる。（水口施用） 	<ol style="list-style-type: none"> 1 手振り散布の場合は、ジャンボ剤や豆つぶ・楽粒・FG剤と同様の注意が必要。 2 田植同時処理の場合は、1キロ粒剤と同様の注意が必要。 3 水口施用は、1～2cmの水深で水尻を止め、水口から勢いよく入水しながら所定量の薬剤をいっきに投入し、水深が5cm程度になったら止水して湛水状態を保つ。水尻からのオーバーフロー（あふれ出す）に注意が必要。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は J A 全農いばらきホームページでもご覧になれます。